

夜のあけよかしと待あかして、いつしかおきて寢殿の南面を取まつらひて營居たり、辰刻ばかりに、時の歌よみ共集り來りて、今や鶯なくとうめきしあひたるに、さきくは巳時ばかりかならず鳴が、午時のさかりまでみえねばいかならんと、思て、此男をよびて、いかに鶯のまだみえぬは今朝はいまだこざりつるか、と問給へば、鶯のやつは、さきくよりもとく参りて侍つるを、歸げに候つる間、召とめて候と云、めしとむとはいかむとへば、取て参らんとて立ぬ、心もえぬ事かなと思ほどに、木の枝に鶯をゆひつけてもて來れり、大かたあさまし共云ばかりなし、こはいかにかくは、えたるぞとへば、昨日の仰に、鶯やるな候しかば、いふかひなくに、がし候はば、弓箭取身に心うくて、ぞんとうをば、おとして侍ると申ければ、輔親も居集れる人々も、あさましと思て、此男の顔をみれば、脇かひとりていきまへひざまづきたり、祭主とく立ねと云けり、人々おかしかりけれ共、此男のけしきにおそれて、えわらはず、ひとり立ふたり立て、皆かへりにけり、興さむるなどは、こともをろかなり、

〔多武峯少將物語〕四月つごもりばかりに、うぐひすのす三つばかり、むめすちばかりいれたり、○中略うぐひすのあふすちには、かくぞせんとあり、

わがすみか君はゆかしく思ほえず、あな鶯のすのうちをみよ、かへし。○中略

〔多武峯少將物語考證〕うめすちばかり云々、この七字解がたし、下文を考るに、鶯のあうすちとあれば、こ、も鶯のす三つばかりに、あうすちばかりいれて、と有しを、あやまれるか、あうすち

は、和名抄菓類云漢語抄云鸚實、須云阿字之智、一曰字久比、乃岐乃美、今按所出未詳、

〔吾妻鏡 十九〕承元五年元建曆閏正月九日壬戌、自永福寺邊被移殖梅樹一本於御所北面、是北野廟庭種也、匪濃香之絶妙、南枝有鶯栖、依之被賞、翫之云云、